

研究ノート

立命館大学びわこ・くさつキャンパスにおける
英語再履修教育について*

——必修英語科目で単位を習得できない原因と対策 その1 (第1期および第2期)——

上 田 眞理砂[†]

I. はじめに

立命館大学びわこ・くさつキャンパス (BKC) における「実践英語」科目の経緯

II. 現状

1. 概要：受講者総数, 単位数, 開講クラス数, 受講定員, 担当教員数, 時間割配置, 評価方法
2. 受講者数と単位取得率
 - 2-1 第1期：2002年度～2006年度
 - 2-2 第2期：2007年度～2009年度
3. 問題点と対策
 - 3-1 必修英語科目の単位未習得原因
 - 3-2 再履修英語科目の単位未習得原因

III. おわりに：到達目標

I. はじめに

BKC における「実践英語」科目の経緯

2002年4月、本学の経済学部・経営学部・理工学部の3学部統一で、必修英語科目の単位未習得者を対象に、英語の基礎学力の充実を図るため、再履修科目として「実践英語」が開始された。「実践英語」は、必修英語科目の単位回復科目であり、重複受講が可能な科目である。2005年度からは、情報理工学部(2004年度開設)が加わり4学部統一科目として展開されていた。2009年度をもって「実践英語」は閉講され、2010年度からは「再履修英語」が開講されている。なお、2002年度～2009年度の間、「再履修英語」科目は、学部ごとに毎年履修登録条件が異なっていたために、本論では受講生の学部別分析については論じていない。

*この研究ノートは、上田眞理砂。(2011). 立命館大学びわこ・くさつキャンパスにおける英語リメディア教育について, 立命館経済学, 第60巻, 第2号, 104-111. の続きである。

[†]立命館大学教授, Ph. D. (言語文化学) marisa@ec.ritsume.ac.jp

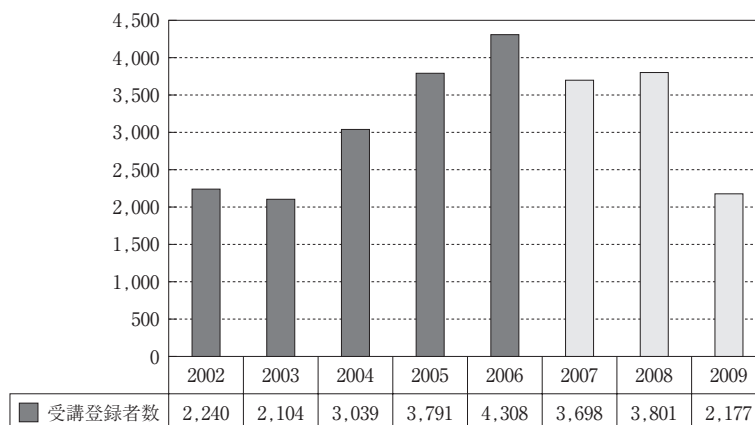
Ⅱ. 現 状

1. 概要：受講登録者数，単位数，開講クラス数，受講定員，担当教員数，時間割配置，評価方法

受講登録者数

まず初めに，この科目は重複受講が可能な科目であるため，例えば1人で月曜日～金曜日までの各曜日5限のクラスを受講登録し，受講することも可能である。その場合，受講登録者数は「5人」となり，受講登録者数=受講者の実数ではないことを明示しておきたい。2002年度～2009年度までの受講登録者数は以下の通りである。以下の図1で示すように2002年度に，BKCで英語再履修教育が開始された当初から受講登録者数は2,200人を超え，年々増え続けた。2006年度には，ついに4,000人を超えてしまい，その後は一進一退を繰り返し，2009年度においても2,000人を優に超える受講登録者がいた。

図1：2002年度～2019年度「実践英語」受講登録者数



単位数

次に単位数であるが，「実践英語」の単位数は1であった。現在，各学部とも卒業に必要な単位数は124である。そのうち，卒業に必要な英語科目の単位数は，以下の表1が表すように，所属学部や所属学科，履修言語コースによって異なる。

表1：2016年後期現在の各学部の卒業に必要な英語科目の単位数

学 部	卒業に必要な英語科目の単位数
経済学部	4～16
理工学部	6～10
情報理工学部	10
経営学部（2015年度に OIC に移転）	4～16

開講クラス数

開講クラス数は18で、前期10クラス（月曜日～金曜日、各曜日2クラス）・後期8クラス（年度によって各曜日に開講されているクラス数は異なった）が開講されていた。

受講定員

各クラスの受講最大定員は50名である。

担当教員数

前期は10名、後期は7～8名の教員が担当していた。毎年、情報理工学部の専任教員1名を除き、それ以外の全クラスを非常勤講師が担当していた。通年で担当する場合もあった。

時間割配置

2009年度までの「再履修英語」の開講時限は、全てが5限ではなく、2限や3限といった他の必修科目と重なる可能性の高い時間割配置になっていた。

評価方法

開講初年度の2002年度から2011年度までの期間、「実践英語」科目では、開講中に実施される小テスト6回と大テスト3回（合計9回）を必ず全て受験しなければならなかった。1つでも受験しなかった場合、その時点で不合格となり、単位を取得できなかった。「実践英語」科目は、必修英語科目とは異なる評価基準が適応されており、評価はCまたはF（不合格）のみである。

全15回の講義の内、最低2/3（=10回）の出席が、単位取得に必要な不可欠であるのは必修英語科目の場合も同じであるが、100%満点中60%以上であれば、成績や受講生の所属レベルによって通常の科目ではA+、A、B、Cの4つの評価に分かれる。経済学部の場合、Upper Intermediate レベルと Intermediate レベルの受講生は、90%以上でA+、80-89%でA、70-79%でB、60-69%でCと評価される。Pre-intermediate レベルの受講生は、原則的にA+評価は無しで、60-69%でC、70-100%でBと評価される。

2. 受講登録者数と単位取得率

2-1 第1期：2002年度～2006年度

本論において、1回生の後期から履修が可能であった2002年度～2006年度の期間を第1期とする。この期間は以下の図2が表すように、受講登録者全員に占める2回生および3回生の比率が一番多く、2回生の平均受講登録者数比率は33%、3回生は32%であった。両回生の平均受講登録者数比率の合計は65%と過半数を占めている。このことは学部を問わず卒業に必要な必修英語科目の単位を早い段階で取得し、4年間で卒業できるよう、可能な限り不安要素を取り除き、安心したいという受講者の心理が大きく作用していると考えられる。

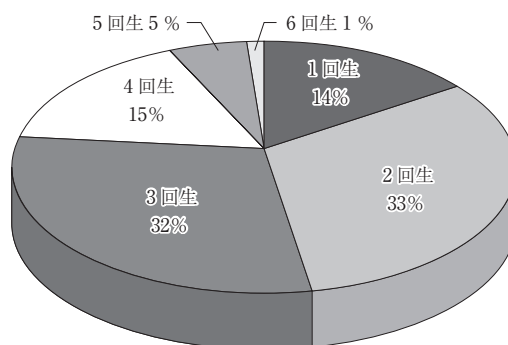
しかし、4回生になるまでに卒業に必要なこれらの英語科目の単位を、必ずしも全員が取得できず、全受講登録者数に対する4回生受講登録者数の平均比率は15%と受講登録者の約6人に1人が4回生であった。5回生以上の受講登録者も例年存在しており、全受講登録者数に対する

5 回生受講登録者数の平均比率は 5 %であった。全受講登録者数に対する 6 回生受講登録者数の平均比率は 1 %であった。7 回生や 8 回生になると、これらの回生に達するまでに、ほとんどの学生が卒業することもあって、全受講登録者数に対する 7 回生や 8 回生受講登録者数の平均比率は、データ上ではほぼ 0 %であるが、7 回生は 2004 年度に 17 人、2005 年度に 30 人、2006 年度に 23 人、8 回生は 2005 年度に 5 人、2006 年度に 21 人も受講登録者が実際にいた。以下の表 2 は、第 1 期各年度の受講登録者各回生の比率を、図 2 は第 1 期受講登録者各回生の平均比率を示している。

表 2：第 1 期 各年度の受講登録者各回生の比率

回生比率 (%)	2002	2003	2004	2005	2006
1 回生	13	19	17	10	12
2 回生	33	29	36	39	30
3 回生	36	31	26	34	31
4 回生	13	16	14	12	19
5 回生	5	5	5	4	5
6 回生	0	1	2	1	2
7 回生	0	0	0	0	1
8 回生	0	0	0	0	0
合計	100	100	100	100	100

図 2：第 1 期 受講登録者各回生の平均比率



2-2 第 2 期：2007 年度～2009 年度

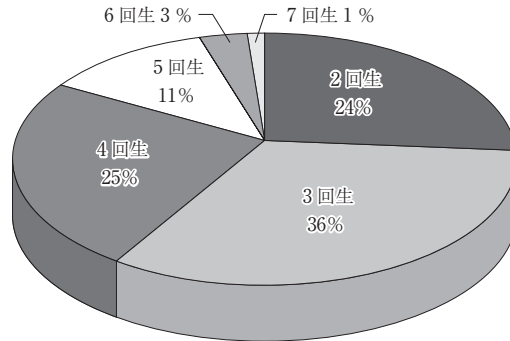
本論において、1 回生の後期履修ができなくなった 2007 年度～2009 年度の期間を第 2 期とする。この期間は、以下の図 4 が示すように、受講登録者全員に占める 3 回生の比率が一番多く、平均受講登録者数比率は 36%、次いで 4 回生は 25%、2 回生は 24%であった。2 回生と 3 回生の平均受講登録者数比率の合計は 61%と、第 1 期同様やはり過半数を占めていた。このことは第 1 期同様、学部を問わず卒業に必要な必修英語科目の単位を早い段階で取得し、4 年間で卒業できるよう、可能な限り不安要素を取り除き、安心したいという受講者の心理が大きく作用していると考えられる。

しかし、4 回生になるまでに卒業に必要なこれらの英語科目の単位を必ずしも全員が取得できず、全受講登録者数に対する 4 回生受講登録者数の平均比率は 25%と受講者の実に 4 人に 1 人が 4 回生であった。5 回生以降の受講登録者もやはり存在しており、全受講登録者数に対する 5 回生受講登録者数の平均比率は 11%であった。全受講登録者数に対する 6 回生・7 回生受講登録者数の平均比率は、それぞれ 3%と 1%であった。8 回生になると、さすがにこの回生に達する迄にほとんどの学生が卒業することもあって、全受講登録者数に対する 8 回生受講登録者数の平均比率は、データ上では 0%であるが、7 回生は 2007 年度に 35 人、2008 年度に 42 人、2009 年度に 40 人、8 回生は 2007 年度に 5 人、2008 年度に 8 人、2009 年度に 7 人も受講登録者が実際にいた。以下の表 3 は、第 2 期各年度の受講登録者各回生の比率を、図 3 は第 2 期受講登録者各回生の平均比率を示している。

表3：第2期 各年度の受講登録者各回生の比率

回生比率(%)	2007	2008	2009
1回生	0	0	0
2回生	36	30	6
3回生	30	37	39
4回生	20	20	34
5回生	11	8	15
6回生	2	4	4
7回生	1	1	2
8回生	0	0	0
合計	100	100	100

図3：第2期 受講登録者各回生の平均比率



一時は、受講登録者数が4,300人を超える非常事態となったが、様々な対策が功をなし、2009年度からは2,000人台に激減した。しかし、「実践英語」科目は、いくつかの問題点を抱えており、次のセクションでは、その問題点と対策について述べたい。

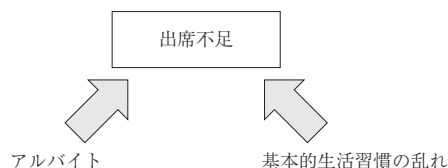
3. 問題点と対策

3-1 必修英語科目の単位未習得原因

このセクションでは、必修英語科目の単位未習得原因として考えられるいくつかの要因と、その対策について考察する。

〈原因その1：出席不足〉

筆者は本学で1995年から教鞭をとっているが、必修英語科目で単位を取得できない最大の理由は、英語そのものの実力や能力ではなくて、実は「出席率の低さ」であると常々感じていた。15週間というごく限られた短期間において、単位取得に必要な最低回数である10回出席できないことが、最大の理由であると感じていた。というのも、筆者が「再履修英語」を担当していた2009年度、受講生に単位を取得できなかった元の必修英語科目教員名を学生に尋ねても、「メガネをかけていた」とか「男性だった」などと言うばかりで、大多数の学生は答えることができなかった。彼らは、ほとんど出席していなかったので、担当教員名すらわからなかった。それでは、彼らは何故必修英語科目を15回中、6回以上も欠席してしまうのか。大学に来ないで何をしているか。筆者は、以下の図のように出席不足の主な理由は、アルバイトと基本的な生活習慣の乱れの2つであると考えている。



出席促進対策の一つとして、筆者は、開講第1週目の初回講義において、出席は毎回取ること、遅刻の定義（筆者のクラスでは、講義開始後20分までの入室）、遅刻3回で1回の欠席として扱われること、本学の全学部の語学科目では、全15回の講義の内、最低2/3（10回）の出席が単位認定の前提条件となっていることをクラス・ルールとして説明・印刷・配布し、出席に関して情報の周知徹底を図っている。さらに、筆者は担当するクラスごとにメーリング・リストを作成・利用しており、毎回講義後、このメーリング・リストを介して、Appendix 1のような次回講義進行予定内容、持参物、課題、試験情報などの詳細を、当該クラスの受講登録者全員に送信している。

〈原因その2：勉強不足・動機の低さ〉

必修英語科目で単位を取得できない他の原因として、勉強不足や動機の低さが密接に関連していると筆者は考えている。経済学部・経営学部・理工学部・情報理工学部のどの学部の受講生も、外国語教育や英語学習を専門分野として専攻していないので、十分に強い動機にはなっていないと筆者は考える。

〈原因その3：優先順位の判断ミス〉

必修英語科目の単位が取得できなかった受講生は、明らかに優先順位の判断にミスがあったといえるだろう。学生時代には、アルバイトなどの社会経験や部活動、サークル活動・趣味などを通して、友人や仲間との人間関係の構築、ボランティア活動などもとても大切だと筆者は考えている。しかし、必修英語科目の単位を落としてまでも、優先すべきことではない。果たすべきはまず学生としての本分ではないか。「すべきこと」と「やりたいこと」があれば、まず前者を優先すべきではないか。

〈原因その4：時間管理能力の低さ〉

「優先順位の判断ミス」と密接に関連しているその他の原因として、「時間管理能力の低さ」があると筆者は考えている。多くの受講生は、朝一番の講義課題を当日未明から着手し、結局は完成・提出できず、いつ着手し始めたのかを聞いて愕然とした経験は、一度や二度ではない。多くの大学生は、自身の実務能力を把握できていないと筆者は感じている。次のセクションでは、再履修英語科目の単位未習得原因として考えられるいくつかの要因と、その対策について述べたい。

3-2 再履修英語科目の単位未習得原因

問題1：受講登録者数の多さ

このセクションでは、必修英語科目の単位未習得原因として考えられるいくつかの要因と、その対策について考察する。初めに、「再履修英語」の受講登録者数は非常に多い。その原因の一つとして、第1期（2002年度～2006年度）は、前期で必修英語科目の単位を取得できなかった受講生は、1回生の後期から履修が可能であったことが大きい。必修英語科目の単位を前期で取得できなかった受講生の多くが、後期開始前にとりあえず「再履修英語」科目の履修登録をしたが、卒業までに十分な時間があることから安易な気持ちになり、後期開講後に「再履修英語」科目に出席しないという受講生が非常に多かった。2002年度の「再履修英語」受講登録者数は2,200人

を超えてしまい、さらに2006年度には未曾有の4,300人を超える異常事態に陥ってしまった。

2002年度～2005年度の期間の平均単位取得率は、最低53%～最高64%と常に半数を超えていたが、2006年度には不合格率が53%と、単位取得平均率を上回ってしまい（図4）、また、前述の様に受講登録者数も4,300人を超える等（図1）、開講以来、未曾有の最悪事態に陥った。その原因であるが、第1期は、たとえ1回生であっても、前期で必修英語科目の単位を取得できなかった場合、後期に受講登録が可能であったため、後期開始前にとりあえず履修登録はするが卒業までに十分な時間があることから安易な気持ちになり易く、開講後は出席しなくなってしまうというケースが十分に考えられ、これによって受講登録者数は増えるが、単位取得率が下がってしまったのではないかと考えられる。以下の図4は、第1期平均単位取得率を、図5は第1期の各回生の平均単位取得率を表している。

図4：第1期 平均単位取得率

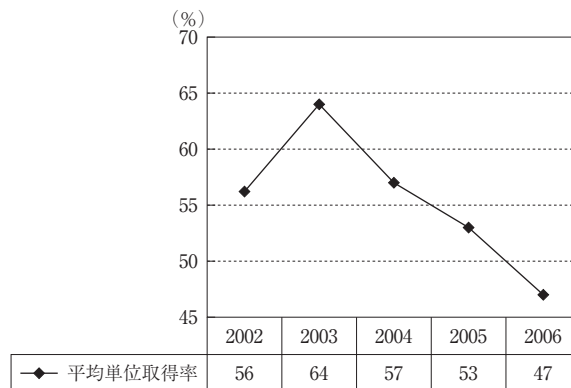
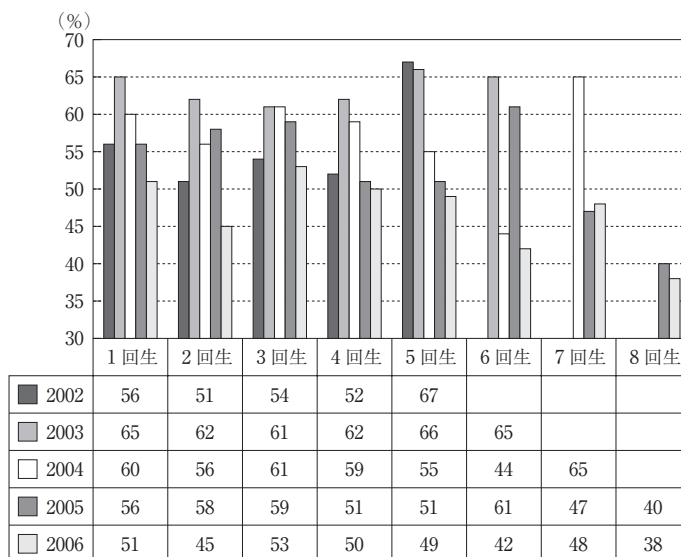


図5：第1期 各回生 平均単位取得率



そこで、その対策として、2007年度からは1回生がたとえ必修英語科目の単位を前期で取得できなかったとしても、後期から「再履修英語」を受講できないように受講登録に関する条件が変更された。

1回生が受講登録できなくなった2007年度より単位取得率は毎年徐々に上昇し、2009年度には開講以来最高の61%を記録した（図6）。この理由として、2007年度から後期追加登録には、回生による制限を設け、履修登録の条件が変更されたことが考えられる。2007年度からは後期追加登録は、4回生にのみ許可された。一方で、1回生の後期追加登録は認められなくなった。第1期のように、前期で必修英語科目の単位を取得できなかった1回生は、後期開始前にとりあえず履修登録はするが、卒業までに十分な時間があることから、結局は講義に出席しなかったり、出席しても途中から出席しなくなるといったことが多々観察されたが、2007年度から実施された後期追加登録に関する回生による制限は、そのような安易な気持ちの受講生を減らすために一定の効果があったと考えられる。以下の図6は第2期各年度の平均単位取得率を、図7は第2期各年度の各回生の平均単位取得率を表している。

図6：第2期 平均単位取得率

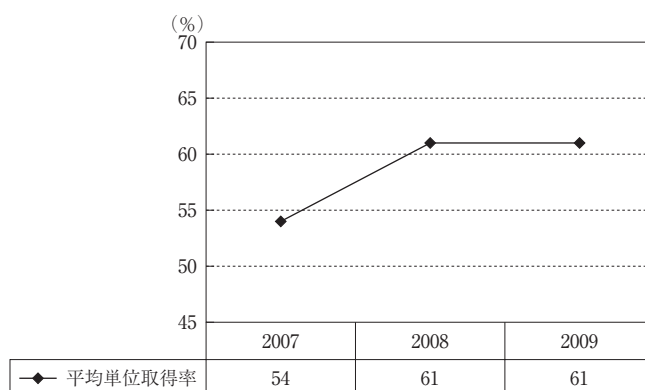
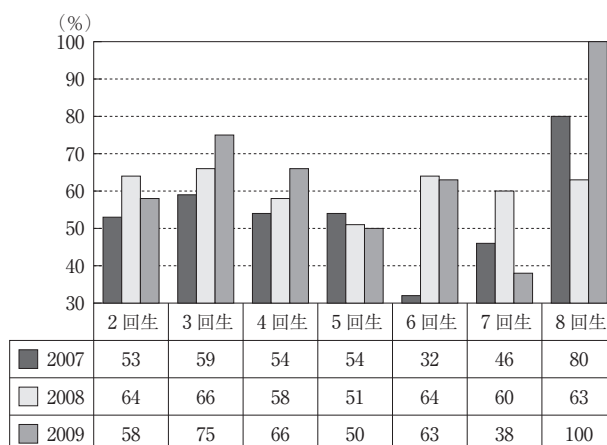


図7：第2期 各回生 平均単位取得率



問題2：評価方法

開講初年度の2002年度から2011年度までの期間、「再履修英語」では、開講中に実施される小テスト6回と大テスト3回（合計9回）を必ず全て受験しなければならなかった。1つでも受験しなかった場合、その時点で不合格となり、単位を取得できなかった。この評価基準を作成した教員は不明だが毎回の出席を促進する目的でこのような評価基準を設けたのであろうが、想像力が欠如していたと言わざるを得ない。というのは、この評価基準では開講早々、たった1回でもテストを受験しなければ、その後、全講義に出席し、60%以上の成績を取得しても単位は認定されず、不合格になった。不条理極まりない評価方法であったので、その結果、出席率はどんどん下がり、単位の回復には全くならなかつた。この評価基準は、却って受講生の学習意欲を失くす原因となっていた。この評価方法は2011年度をもって撤廃され、2012年度より新しい評価方法が導入された。

問題3：受講クラスの確定時期

「実践英語」の受講登録方法は、まず開講前～第1週目の終わり頃までに学生は、言語教育企画課窓口で自分の希望する曜日やクラスを選択し、履修登録を済ませる必要があった。

次に、履修登録締切後に、定員（50名）を超過したクラスがあった場合、抽選が実施され、各クラスの受講者発表がされた。希望したクラスへの抽選に当選した受講生は、当該クラスへ出席する一方で、抽選に外れた受講生は抽選発表当日を含む4月末迄の期間に追加募集が実施されるので、言語教育企画課窓口で、定員に達していないクラスを選択・履修登録をする必要があった。オンライン上での受講登録や自動抽選は2014年度前期に開始されたので、第1期（2002年度～2006年度）も第2期（2007年度～2009年度）も全て、言語教育企画課窓口で対応していた。

4月末迄追加募集が行われるので受講クラスが最終的に確定するのが第3週目であった。第3週目になるまで最終的な受講クラスが確定しないということは、すなわち第3週目になるまで、受講者数が確定しないことを意味し、仮出席簿すら無い状況で、担当教員は受講者数が確定するまでの期間である第1週目と第2週目において、毎回全クラスでの配布印刷物を各50部準備しなければならなかつた。さらに、毎週受講生が同一ではないので、クラス・ルールや単位習得に必要な条件の説明、合計8回のテストの実施時期など、通常であれば第1週で終了するイントロダクションを第3週目になるまで毎週毎週繰り返さなければいけないクラスも発生していた。このように、第3週目になるまで受講生が定まらないことで、「再履修英語」科目担当教員には、必修英語科目には発生しないような問題が発生していた。第3週目になるまで受講者数が確定しない原因は、受講登録に来ない学生が非常に多いことが挙げられる。

そもそも、たとえ希望したクラス受講の抽選に外れたとしても、開講第1週目の終わり頃までに言語教育企画課窓口で、定員に達していないクラスを選択・履修登録さえすれば受講クラスが確定するのであるが、実は受講登録に来ない学生が大勢いたのである。「実践英語」を受講し、単位を取得しなければ卒業できず除籍処分となるにも関わらず受講登録に来ない学生が大勢いたのが現実であった。このような理由から、追加募集期間を開講第3週目の最終日としていたのである。但し、後期はこの範疇にあらざ追加募集期間は当選発表から数日間としていた。最終日に受講登録する学生も毎年大勢いた。

Ⅲ. おわりに：到達目標

「実践英語」は、単位回復科目であり、本来は必修英語科目において単位取得が望ましいのはいうまでもない。しかし、現実的には「実践英語」の受講者数を0にすることはできない。2002年の開講以来、2009年に至るまで当該科目の履修登録者総数は25,158名と2万人を超える。しかしながら、必修英語科目の単位取得に至らなかった原因が何であったかのアンケートは実施されたことがなく、従ってデータもない。大多数は出席不足によるものと考えられるが、それはあくまでも担当教員の推測や感じることであって、裏付けるデータはない。ある特定の問題を改善・解消するためには、原因を明らかにすること無しには成し得ない。そこで、2015年後期に「再履修英語」のクラス（「実践英語」は2009年度に閉講し、翌年度からは「再履修英語」が開講）で受講者および担当教員を対象としてアンケートを実施した。得られたデータを分析することで、必修英語科目で単位が取得できなかった原因を明らかにし、それらを当該科目の担当教員全員に伝達することで、「再履修英語」の受講登録者数を更に減少させたいと筆者は考えている。

経済学部では、例年、前期・後期の開始前に経済学部の英語科目を担当する全教員を対象に英語担当者懇談会というオリエンテーションを開催しているが、この懇談会において「再履修英語」のデータを開示し、情報を共有することで、少しでも「再履修英語」の受講者を減らしたい。

Appendix 1

受講生のみなさんへ 上田眞理砂です。以下、熟読して次回講義に備えて下さい。

〈重要なお知らせ〉

1. Test of Chapter 3 からは、ノートの持ち込みはできません。

〈次回講義予定内容〉

1. 課題回収 (=5%)
2. Questionnaire 回収
3. Test of Chapter 3 (=10%)
4. 返却物
5. Feedback of Questionnaire
6. 解答&解説
—— Time Permitted ——
7. Review of Listening Strategies

〈課題〉

1. pp. 40-46 の知らない単語調べ
2. p. 41-C, p. 42-D & E, p. 44-K
3. p. 44 J (=5%) 添付の所定用紙を用い、ディクテーションをしてきて下さい。

〈試験情報〉

Test of Chapter 3 (=10%)

〈Office Hour〉

Office Hour とは、英語や留学など英語全般に関してどんなことでも、予約なしで飛び込みで質問できたり指導を受けたりすることができる時間です。後期の Office Hour: 木曜日 3 限
なお、木曜日 3 限が都合が悪い人は、希望する日時を第 3 希望まで記し、送信して下さい。

〈持参物〉

1. マーカー (色違いを 2 本)
2. 単語カード
3. イヤホン

〈質問がある場合は?〉

For further information and any enquiry, please send me an e-mail at marisa@ec.ritsumeai.ac.jp

件名: Mon 1 / your name / 用件を簡潔明瞭に単語で。

上田眞理砂 (博士: 言語文化) (専門分野: リスニング)

<http://research-db.ritsumeai.ac.jp/Profiles/37/0003615/profile.html>

立命館大学 経済学部 教授 〒525-8577 滋賀県草津市野路東 1-1-1

Office: 077-561-4817 (Ext. 7383) アクロスウイング 4F 433

References

- 上田真理砂. (2011). 立命館大学びわこ・くさつキャンパスにおける英語リメディアル教育について—必修英語科目の単位未習得者—, 立命館経済学, 第60巻, 第2号, 104-111.
- 上田真理砂. (2015). 必修英語科目単位不認定者を対象とした英語リメディアル教育について—立命館大学びわこ・くさつキャンパスのケース— A Consideration about Some Problems of Remedial English Courses at Biwako Kusatsu Campus, Ritsumeikan University, 社会システム研究, No. 31, 109-124.